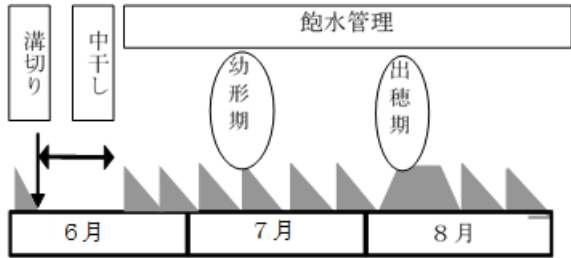


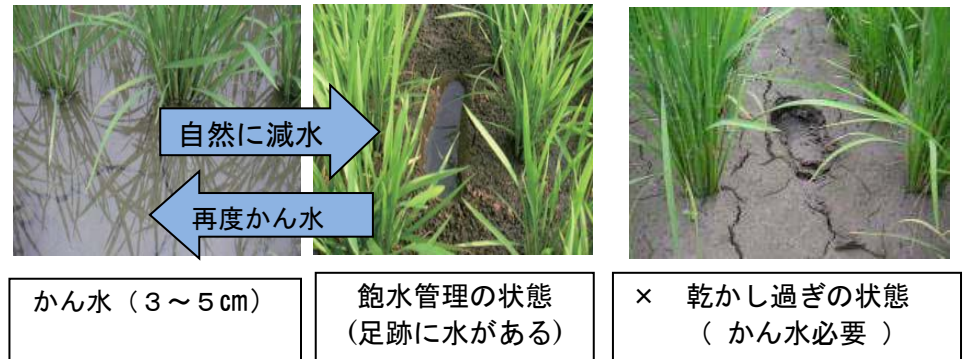
# 的確な穂肥診断で、高品質安定生産を目指そう!

## 1 中干し後の水管理

- 中干し終了直後は、浅水の間断かん水を実施し、その後徐々に飽水管理（田面や足跡や溝に水が溜まっている状態）へ移行します。
- 飽水管理で、出穂後の根の活力を維持します。



【飽水管理の方法】



## 2 品種別出穂予想と穂肥時期のめやす(6月18日現在の予想日) ～出穂期は前年並みに早まる見込み～

品種	出穂予想日	1回目穂肥		2回目穂肥		2回合計窒素量 (kg/10a)
		時期	出穂前日数	時期	出穂前日数	
新潟次郎	7/18頃	6/18～6/23頃	30～25	7/4頃	14	6
五百万石	7/21頃	7/1頃	20	7/11頃	12	1～2
つきあかり	7/21頃	6/21～6/26頃	30～25	7/7頃	14	3～3.5
わたぼうし	7/23頃	7/1～7/3頃	22～20	7/11～7/13頃	12～10	2～3
こしいぶき	7/27頃	7/4頃	23	7/13頃	14	2
こがねもち	7/31頃	7/13～7/16頃	18～15	7/22頃	10	1～3
コシヒカリ	8/1頃	7/14～7/17頃	18～15	7/22頃	10	1～2.5
いただき	8/6頃	7/12頃	25	7/23頃	14	6
みずほの輝き	8/11頃	7/17頃	25	7/28頃	14	3

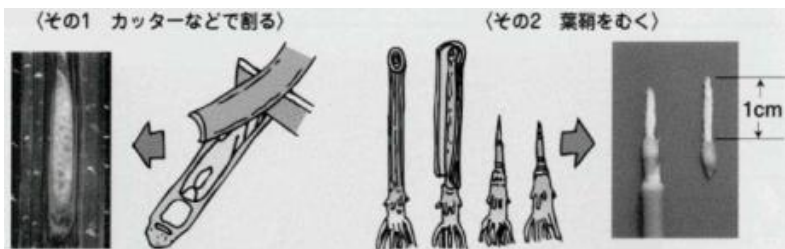
◎ 稚苗5月10～15日頃、中苗5月15～20日頃に移植した場合を想定。  
◎ 今後の天候で前後する可能性がある。

## 3 穂肥診断のポイント ～ほ場ごとに自己診断しよう!～

○ 穂肥は、下記の手法で必ず稲の生育診断を行うとともに、天候や病害虫の発生状況及び地力等を総合的に判断して決める。

(1) 穂肥診断の手順（幼穂長で施用日を決め、草丈と葉色で施用量を判断する。）

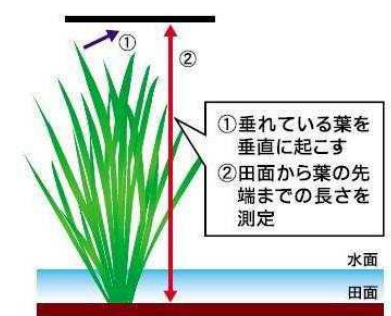
① 幼穂長を測り、出穂前日数を判断する。



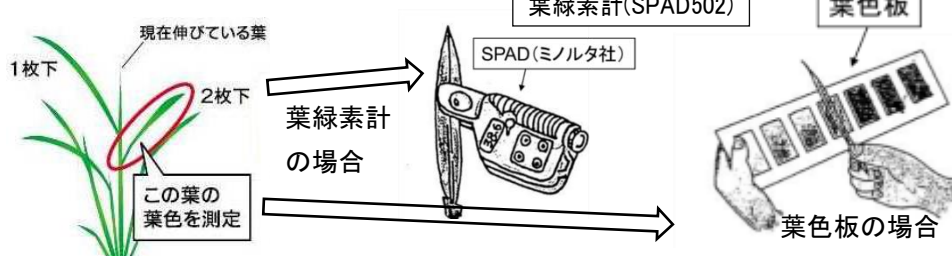
【幼穂長と出穂前日数のめやす】

幼穂長(cm)	出穂前日数
0.02	30日
0.1	24日
0.2	20日
0.5～1.0	18日
4.0～6.0	12日
10.0～12.0	10日

② 草丈を測る。



③ 葉色(単葉)を測る。



◎ 草丈・葉色調査は、水口や畦畔際を除き、ほ場内の生育中庸株5株程度の平均とする。

(2) コシヒカリの穂肥診断 ～上記の調査結果を基に、穂肥時期及び量を判断する～

【1回目の穂肥時期及び施用量: 幼穂形成期(出穂24日前頃)の生育による診断】

草丈	葉色(単葉) SPAD値 34～32 葉色板 4.2～3.9	SPAD値 35以上 葉色板 4.4以上
70～75cm 以内	時期・量とも基準どおり施用 →出穂18日前: 1.0kg/10a	時期を遅らせて施用 →出穂15日前: 1.0kg/10a
75～80cm 以内	施用量を減らす →出穂18日前: 0.5～0.8kg/10a	時期を遅らせ、施用量を減らす →出穂15日前: 0.5～0.8kg/10a
80cm 以上	施用できない	施用できない

【2回目の穂肥時期及び施用量: 出穂12日前頃の診断】

出穂14～12日前の葉色(単葉)	出穂10日前の穂肥量(10a当たり)
SPAD値 32～34 葉色板 4.2～4.5	基準量どおり施用 1.0～1.5kg
SPAD値 35以上 葉色板 4.6以上	施用量を減らす 0.7～1.0kg 未満

※2回目穂肥は、後期栄養維持のため確実に施用する。  
※全量基肥肥料であっても、葉色低下が見られる場合は施用する。

(3) こしいぶきの穂肥診断 ～1回目の穂肥は、草丈・葉色から判断し、2回目の穂肥は確実に施用～

【1回目の穂肥時期及び施用量: 幼穂形成期(出穂24日前頃)の生育による診断】 ※葉色の数値は参考値 【2回目の穂肥時期及び施用量】

草丈	葉色 SPAD値 36以下、葉色板 4.6以下	SPAD値 37以上、葉色板 4.7以上
60cm 未満	時期・量とも基準量どおり施用 →出穂23日前: 1.0kg/10a	時期を遅らせて施用する →出穂20～18日前: 1.0kg/10a
60cm 以上	施用量を減らす →出穂23日前: 0.8kg/10a程度	時期を遅らせ、施用量を減らす →出穂20～18日前: 0.8～1.0kg/10a

時期: 出穂14日前  
施用量: 1.0kg/10a  
※ 低地力地域や後期栄養の不足が懸念される場合は、1.5kg/10a